広報展示室 Koho Gallery 第10回

企画展

東海道五十三次くらべ
―広重VS国貞―

歌川広重「東海道五拾三次之内　庄野　白雨」横大判、
天保４年（1833）頃　当館蔵

毎日だらだらと降り続く雨にうんざりする日々でしたが、ようやくこんな雨の季節がやってきました。ざっと激しく降る白雨、夕立の図です。突然の雨に旅人や客を乗せた駕籠（かご）かきが慌（あわ）てて駆けだしていきます。薄墨の濃淡で摺り重ねられた竹林、坂道や雨の線といった斜めの素材を、巧みに組み合わせることによって、広重はドラマティックな空間を創りだしています。歌川広重、いや浮世絵を代表する傑作といってもいいですね。教科書などでもおなじみの図だと思います。一方、もうひとつの図は国貞の作品です。前景に旅姿の美人を、背景に宿場の外れなのでしょうか、小さな社の前で駕籠かきが旅人に声をかけているところが描かれています。広重の絵とは全く違う図です。

歌川国貞の「東海道五十三次之内」の背景には、歌川広重「東海道五拾三次之内」の図柄が引用されていました（前号参照）が、なぜか宮の図以降（四日市宿を除く）は本図のように、広重の引用ではなくなります。その理由としては、広重が絵を描くスピードに、途中で国貞が追いついてしまったからだといわれています。

つまり国貞が庄野の図を描く頃には、広重のこの傑作はまだ出来ていなかった、ということになります。ところで、横の画面を縦長の画面（それも元絵の四分の一ほどの大きさ！）に描き直すためには、エッセンスーその絵の主眼であり、伝えたい部分ーだけを抽出（ちゅうしゅつ）しなければなりません。果たして広重の傑作は、どういう風に描かれるはずだったのでしょうか。思わず、私だったら、とあれこれ考えてしまうのです。

※これらの作品は企画展「東海道五十三次くらべ―広重VS国貞―」の前期（那珂川町馬頭広重美術館で8月20日まで開催中）に出品されています。

（学芸員　津田　卓子）

歌川国貞「東海道五十三次之内 庄野ノ図」竪中判、天保4～6年（1833―35）頃 金馬車コレクション

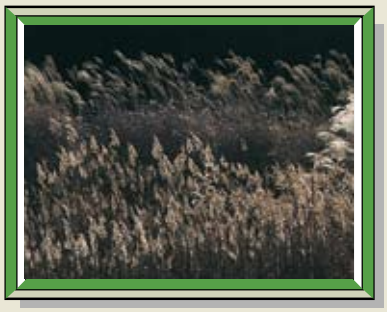
「2006はな・花写真105人展」

馬頭広重美術館視聴覚研修室ギャラリーで7月25日～8月6日に開催された「2006はな・花写真展」。

県内の写真愛好家105人が出品された作品の中から那珂川町出身のお二方の作品をご紹介します。

ミニギャラリー

朝露　和泉一雄さん（小川）



冬ざれ　岡　典子さん（北向田）

No.11　平成18年8月10日号　●編集／企画財政課　☎0287-92-1114　Fax0287-92-1316
●発行／那珂川町役場／栃木県那須郡那珂川町馬頭409　URL http://www.town.tochigi-nakagawa.lg.jp

R100 PRINTED WITH SOY INK
この印刷物は古紙配合率100%の再生紙、植物性大豆インキを使用しております。